

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：24403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23730660

研究課題名（和文） 自伝的記憶の想起体験における主観的側面の探索的研究

研究課題名（英文） Subjective characteristics of remembering autobiographical memories

研究代表者

川部 哲也（KAWABE TETSUYA）

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：70437177

研究成果の概要（和文）：既視体験とプルースト現象についての質問紙調査と半構造化面接調査を実施し、自伝的記憶の想起体験について探究した。既視体験の分析より、自伝的記憶の確信度と精神病理に対する「守り」の機能の関連が示唆された。また、プルースト現象の分析より、臨床場面で生じる記憶想起体験は不完全な想起が生じやすいことが明らかになった。それはここに未だ統合されていない部分の「私」の記憶が訪れた瞬間であると考えられ、治療的契機として重要であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：We investigated about remembrance experience of autobiographical memory by questionnaire and semi-structured interview about déjà vu experiences and Proust phenomena. It was suggested the relation of the reliability of autobiographical memory and the function of "defense" to keep one's mental health. It was suggested that memory remembrance which arises in a clinical scene tends to produce imperfect remembrance. It was the moment the memory of the portion which is not yet integrated, and it was suggested that it is important as a therapeutic opportunity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自伝的記憶、デジャヴ体験（既視体験）、プルースト現象、想起体験、主観的側面

1. 研究開始当初の背景

国内・国外の認知科学分野において、自伝的記憶（autobiographical memory）の研究が2000年代以降盛んに行われている。自伝的記憶とは、過去の個人的な出来事の記憶のことである。これまでの研究成果は認知科学によるものが中心であった。臨床場面において来談者がしばしば自伝的記憶を想起し追体験する現象が見られるにもかかわらず、臨床心理学の立場による自伝的記憶研究はなかった。ゆえに本研究は、自伝的記憶を他の記憶想起体験との比較検討を行うことによ

って解析し、臨床場面における来談者の主観的体験の解明につながる研究を行おうとするものであった。

2. 研究の目的

本研究では臨床場面でしばしば生じる「突然の自伝的記憶想起体験」を2つの側面から理解することを試みた。すなわち、1) その体験の認知的側面をプルースト現象との比較検討によって明らかにする。2) その体験の主観的側面を既視体験（デジャヴ体験）との比較検討によって明らかにする。この2

つが本研究の目的であった。

この2つの側面を探究することにより、臨床場面において生じる「突然の自伝的記憶想起体験」の特徴およびその瞬間の心理状態などが明らかになると考えられた。

3. 研究の方法

初年度から最終年度にかけて、予備調査を含む3つの調査を行った。

(1) 予備調査 (2011年4月)

大学院生15名(男性3名、女性12名、平均年齢25.1歳、SD2.1)に既視体験、ブルースト現象、離人傾向、解離傾向を尋ねる質問紙調査を行い、さらに内3名には面接調査を行った。その結果を受け、その質問紙に対し既視体験およびブルースト現象について正確に回答しうるかどうかを検討し、本調査で用いる質問紙を完成させた。

(2) 第一調査 (2011年6月)

予備調査にて完成させた質問紙を用いて、大学生176名(男性64名、女性111名、性別欄無記入1名、平均年齢19.3歳、SD2.7)に質問紙調査を行った。

(3) 第二調査 (2011年7月～2012年7月)

第一調査にて面接調査協力者を募り、調査可能な日時の都合が合った人は12名であった。この大学生12名(男性3名、女性9名、平均年齢19.8歳、SD1.1)に個別面接調査を実施した。協力者一人ひとりに対し、月に1回の面接調査を1年間継続し、12回の面接調査を行った。のべ面接回数は134回であった(1名は協力者の都合により最初の2回で中止した)。

調査は、半構造化面接の形をとり、1ヶ月以内に自身が体験した「既視体験」または「ブルースト現象」についての認知的特徴および主観的特徴を詳細に聴取した。1ヶ月以内に体験が無かった場合は、描画や箱庭を用いて調査協力者の中のイメージ世界を探索した。また、必要に応じていくつかの種類の自伝的記憶(幼少期に読んだ本の記憶や、繰り返し想起される記憶など)を聴取した。面接調査の最終回においては、1年間の調査内容の振り返りを行い、調査協力者の内観を尋ねた。

4. 研究成果

上記の第一調査および第二調査から明らかになった研究成果は以下の3つである。

(1) 自伝的記憶想起体験の基礎データが得られた。

176名への質問紙調査を実施し、自伝的記憶想起体験に関する基礎データが得られた。

a) ブルースト現象

体験率については「全く体験したことがない」29名(16.5%)、「あまりない」31名(17.6%)、「どちらでもない」12名(6.8%)、「時々ある」83名(47.2%)、「よくある」21名(11.9%)であった。これは先行研究とほぼ一致した。

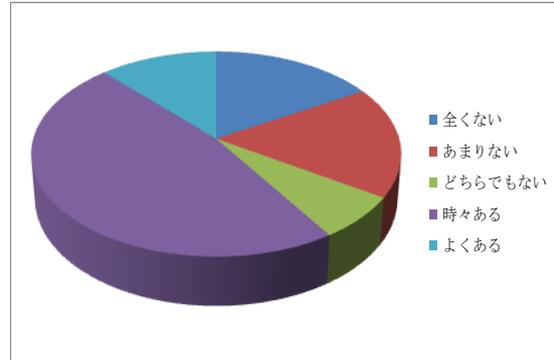


図1 ブルースト現象の体験率

体験頻度については「年に一度以下」22名(15.0%)、「年に数回程度」64名(43.5%)、「月に数回程度」45名(30.6%)、「週に数回程度」13名(8.8%)、「毎日」0名(0%)、無回答3名(2.1%)であった。これは先行研究にない新しいデータである。

b) 既視体験 (デジャヴ体験)

体験率については「全く体験したことがない」19名(10.8%)、「あまりない」16名(9.1%)、「どちらでもない」9名(5.1%)、「時々ある」110名(62.5%)、「よくある」22名(12.5%)であった。これは先行研究と比べてやや高い体験率であった。

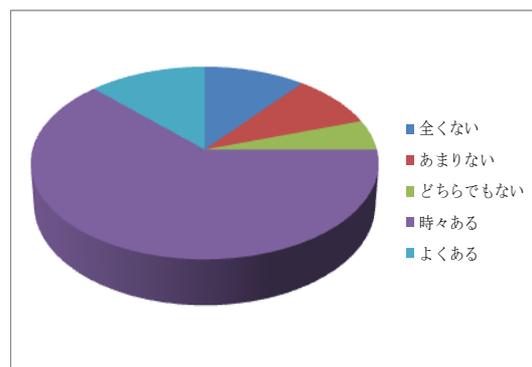


図2 既視体験 (デジャヴ体験) の体験率

体験頻度については「年に一度以下」22名(14.0%)、「年に数回程度」76名(48.4%)、「月に数回程度」48名(30.6%)、「週に数回程度」7名(4.5%)、「毎日」3名(1.9%)、無回答1名(0.6%)であった。これはほぼ先行研究に一致するデータである。

これらのデータから、ブルースト現象のほうが既視体験よりも頻度が低いと感じる人が多いことが明らかになった。このように、

自伝的記憶想起体験に関する基礎データが得られたことは今後の探究をするうえでの貴重な資料となった。

(2) 自伝的記憶の確信度が高い人は、既視体験を体験したことが無いという傾向があった。

面接調査を行い、既視体験の経験が「ある」という人と「ない」という人の意識構造の違いを、それぞれの語りから検討していった。結果、既視体験が「ない」人の特徴として、以下の3つが挙げられた。1) 自伝的記憶への確信度の高さ。2) 既視体験を神秘体験とみなす傾向。3) 既視体験を予知夢体験として語る人との共通点が多く、時間意識としては「過去」に重心を置いた生き方になっていること。つまり、このタイプの人における「突然の自伝的記憶想起体験」においては、自身の自伝的記憶を確固としたものと捉えているので、主観的には全く動揺しないことが多いといえる。ただし自身の記憶への確信が揺らいだ時には、非常に動揺が大きくなる例があった。これを臨床場面における記憶想起として考えると、自伝的記憶が時系列も脈絡もしっかりしており、意外な記憶想起が生じないクライアントの特徴がよく現れていると考えられる。彼らは急激な変容可能性は低いが、その自身の記憶への確信の高さによって安定した自己像を保つことができているという意味で、「守り」に恵まれていると考えることができよう。

(3) ブルースト現象の約半数には感情を伴わないケースが見られた

面接調査を行い、9名から得られた16例のブルースト現象を分析した結果、以下の4点が明らかになった。1) 想起内容が感情付与以前の映像的記憶であったり、感情付与以前の身体変化であったりする場合があること、2) 想起内容の時期の特定が困難な事例が散見されること、3) 想起内容はポジティブなものよりもネガティブなものが比較的多かったこと、4) におい手がかりと想起内容との間に、感情一致効果が見られる例と見られない例がほぼ同数であったことである。この結果から、「突然の自伝的記憶想起体験」の認知的特徴が明らかになったと考えられる。すなわち、におい手がかりなどによって、不意に自伝的記憶想起が生じた場合に、「感情的な体験」とすぐにはつながらないことが多く、その記憶は断片化されていたり、記憶像形成に至る前の状態に留められたりする可能性が示唆された。また、面接調査を実施し体験の詳細について聴取した結果、ネガティブな体験も相当数あることが確認された。ただし、今回の調査は、複数回にわたって行われたものであり、調査者と協力者の関係が密に成立

しており、「ネガティブなことであっても言いやすい」場が形成されていたことも大きな要因であろう。臨床場面では来談者に生じる「突然の記憶想起体験」は、まさにこのような形で生じるものであり、時期が特定されず、記憶像とも呼べないような不完全な「自伝的記憶」が想起されるということが明らかになった。それはしかし、不完全であるがゆえに無駄なものというのではなく、ここに未だ統合されていない部分の「私」の記憶が訪れた瞬間であるとも考えることができる。

(4) 文学作品に描かれた自伝的記憶モデルの検討

最後に、自伝的記憶の「想起体験」について文学者がどのように描いたのかを素材として、その依って立つモデルを検討した。扱った素材は、ブルーストの『失われた時を求めて』と、村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』であった。両者ともに、自伝的記憶の「想起体験」を詳細に描いており、検討するに値する素材であった。

ブルーストの記述からは、ブルースト現象において、1) 嗅覚刺激だけが手がかりになっていない可能性、2) 記憶想起というよりも、過去の実際の時を全体的な経験として生き生きと再体験している可能性、3) 最初はかすかな予感から始まり、徐々に意識水準を下げていくと突然にあふれるように想起される可能性の3つが示唆された。このことは、臨床場面における「突然の記憶想起体験」の実感をよく伝えてくれている資料であると考えられる。

一方、村上春樹の記述からは、1) ブルースト現象と既視体験の近縁性、2) 両者とも意識の深層において、生じる現象であるという可能性、3) ブルースト現象も既視体験も、根源的には「他者」との出会いであることが示唆された。このことは、臨床場面における「突然の記憶想起体験」の背景にあるもの、すなわち、「私の記憶」として語られるもののすべてが、正確な「過去そのもの」ではないという事実を明らかにしていると考えられる。目撃者証言の研究を引き合いに出すまでもなく、記憶は常に改変・更新されている。すなわち、「私の記憶」として語られるものは常に「他者」の影響を受けていると考えられる。その「他者」との関連の中から、「私の記憶」が生じているという基本的な立脚点が改めて示されたといえよう。ここでいう「他者」は、前節で述べた「ここに未だ統合されていない部分の『私』」に対応するものである。

以上の4つの結果から、当初の研究目的であった、臨床場面における来談者のところに生じていることを推察するうえでの貴重な

資料が豊富に入手することができた。今後もこの素材をもとに、多角的な分析を行い、成果を発信していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 川部哲也、半構造化面接法によるブルースト現象の特徴の検討、大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要、査読無、6号、2013、53-60
- ② 川部哲也、既視体験（デジャヴュ体験）の有無判断についての一考察、大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要、査読無、5号、2012、21-28

[学会発表] (計 1 件)

- ① 川部哲也、デジャヴュ体験における主観的体験内容の検討 (4) デジャヴュ体験の有無判断要因の予備的検討、日本心理臨床学会第30回大会秋季大会、2011年9月3日、福岡国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川部 哲也 (KAWABE TETSUYA)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：70437177

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし